

好古集說

卷三



曾5
門4
第7
卷3

好古集說卷三

目錄

山縣大貳乃碑

附記

大岡氏行狀記

同 薰誌

同 碑文

曙物語

山縣大貳等斲刑書

初丁

三丁

七丁

九丁

十三丁

廿丁

山縣大貳の墓の四ッ谷全勝寺にあるをばりて見出
志は明治十六年一月中のころにて其由ハ既ハ
好古雑誌二編第十号に載せて世にあらはしぬ
て齊藤乃支女といふものゝ正しく大貳の玄孫なる

好古集説卷三

好古社幹事佐伯利磨編輯

同社長福羽美静 関

同補助加部巖夫 同校

同同宮崎幸磨

山縣大貳此碑補助宮崎居編纂
志は本社に寄す

山縣大貳の墓の四ッ谷全勝寺にあるをばりて見出
志は明治十六年一月中のころにて其由ハ既ハ
好古雑誌二編第十号に載せて世にあらはしぬ
て齊藤乃支女といふものゝ正しく大貳の玄孫なる

ことをあや得られぬこれに亦同誌三篇第二号に載
せり其後今村亮氏ハ大貳の二子長順字子山号の
第三子としてまゝ其孫に傳へたることを知る
今亮の孫昌減本姓に復して山縣と稱す又明治十七
年三月大貳に遺著柳子新論を拜上せしむる公は
其此原本ハわのれ。手寫して藏せり今まゝ山縣
藤今村等の諸氏相謀りて碑を全勝寺域内即ち大貳墳墓の在
所に建て以て不朽を傳ふるに其篆額山縣柳
莊之碑ハ六字ハ内大臣従一位大勲位公爵三條實美
公よりて其文を左のごとく

山縣先生之碑

先生姓山縣名昌貞字公勝號柳莊通稱大貳以享保十
年某月日生於甲斐巨摩郡筱原村父稱領藏世為郷士
先生天資英邁自儒佛陰陽方技至諸子百家無不綜覈
最長於鈐略之學寶曆六年來江戸十二年下帷於八町
堀教授從游者數百人小幡侯織田信邦巖槻侯大岡忠
光皆延為賓師摺紳家亦與焉先生持論以尊王室擯
霸府為主幕府忌之以為謀不軌中以大辟寶明和四年
八月廿二日也享年四十有三公卿列侯連坐者亦多云
門人小泉養老葬之於四谷全德寺今之全勝寺是也長

子好春冒齊藤氏次子長順冒令村氏皆為幕府避之也
事具於家譜長順即亮先考也明治十三年
今上巡幸過山梨縣以其夙齋勤王之志為唱義首謀特
賜祭典於是亮孫昌減始復本姓又刻其所著柳子新論
以獻之其他有院政記略素難評醫事撥亂天經發蒙省
私錄孫子講義大岡行狀記等之著今茲丙戌五月與住
持勝惟白謀改建碑因錄其梗槩如此
明治十九年五月 不肖孫亮謹撰 平田宗敬書
そもく大貳の勤王憂國の志士なること久其著す所
の柳子新論を閲して之を知るべきなり

此事蹟は於て明瞭なりとす然れども世にこれを知る
もの甚稀なりと去々明治十三年山梨縣御巡幸の
際特々祭案を賜ひて新聞紙の公告する所とな
り世普く其人ありとを知らるるに蓋し祭案を賜
ふ此事ハ當時元老院議官福羽美靜君の發議は同る
ときけり今や昌減本姓は復し亮碑文を撰て事蹟
を不朽に傳へ以て其先を顯るるに多かるべきなり

因に碑文中よりゆる大貳著す所の大岡行狀記及び
林信言撰ふ所の大岡氏碑文を得られざるを左に

併世載寸

東都故侍衛總督從四位行出雲守岩槻侯義山藤原公卒遺命樹碑城邑嗣君使臣乞文於祭酒林公臣謹考之譜牒及所聞見者併序其略作行狀一篇

惟武州岩槻封君諱忠光姓藤原大岡其氏也先世嘗居參州大岡因以氏為六世祖初屬清康君部下頗有戰功廣忠君亦優待之因賜名曰忠勝始得冒公諱爾來世以忠為名五世祖忠政逮于神祖受命之後從移于東都忠政二子長曰忠世其後漸興家至食萬石次曰忠吉即侯之高祖初興官于東都及後水尾天皇納台廟女為后忠

吉為勝於是拜從五位下以美濃守山在京師忠吉三子其後分為三家而祿遂微曾祖忠房乃其季子也祖忠儀相繼為東都兵衛考助七君諱忠利母天野氏以正德二年丙辰三月庚寅生侯于東都四谷是為長子次女某配竹木氏庶母又生三男二女男忠主拜從五位下以山城守為東都侍衛次長景為女兄所養為竹木氏嗣次政斐為石川氏嗣女某配松平氏次某配小笠原氏侯少穎敏且有姿儀享保七年壬寅八月十一歲初謁于有德廟九年甲辰七月參政水野侯奉命引見以孺子能應對可以幹事也後命新賜廩三百石引為世子侍衛居三月乃有

俸治如故事十二年丁未十二月拜從五位下任出雲守
侍衛如故十八年癸丑十一月有德廟召見以其能得世
子之意頗加勉勵增加秩五百石通前八百石地在武州
立崎玉
以全三版位為諸侍衛上元文二年丁巳十二月實為侍
衛長每歲賜黃金百兩四年己未五月命攝侍中事祿位
如故寬保三年癸亥四月丁考助七君之憂服未闋奪情
起復職官延享二年乙丑有德廟辭職世子自西城入嗣
侯亦從焉是歲九月增加廩千二百石通前二千石位準
諸將明年丙寅十月實命為侍中始干預朝政因停其廩
賜以田祿地在相州
相樂三郡之內更增廩三千石通前為五

千石賜第四安門外初城州相樂郡祝園村入三百石國
初野賜而大岡氏世食焉及助七君沒也朝議當收錄上
書請除侯之賜田在武州者換以此地不報至是侯亦再
請為台命特聽之寬延元年戊辰十一月更停其廩賜以
田祿地在常州
新室曆元年辛未十二月初封侯賜邑于
總州勝浦野食萬石地在總州
房州長狹三郡之內職官並如故
更就舊第益宅二區廣為藩邸時候年甫四十自有德廟
入嗣之後起家為侯者僅々可指數而我侯之興最為奇
異是以東都人士莫不靡然歆慕其風者四年甲戌三月
尋有參政之命兼參掌中外庶務益封五千石地在房州
安房郡相

州植生郡之內移第常磐橋內侯素以能曉習故事見推尚故其職掌亦不與他參政同六年丙子五月起拜從四位下仍總督侍衛諸官兼參謀機密更益封五千石通前二萬石從邑武州岩槻於是始有城焉因除房總二郡之地俱以勝浦之邑入萬石地多魚鹽之利優命留在食封之內明年丁丑三月乞假執封十日乃還當以時也海內列侯大夫士咸知侯有特寵贈遺日多請謁詣門者喧喧不絕以故東都度官苟志於青雲者莫不以侯為矜式而侯益謹慎唯以恭儉為意今茲十年庚辰正月病鬱熱不能食者十數日時偶會幕府有轉進之事中外諸官請謁頻至而

侯未嘗一以疾為辭咸引正寢見之慇懃相告無有倦怠之色病少間即起視事至三月中更益加劇粒食不入及四月中神情漸衰如大小雜事一切無所顧視尚且有言及公事者則俄然明了萬無一遺蓋忠誠自然所致耳幕府聞而憂之遣醫員及中貴人等屢存問兼賜藥食者前後數次世子以下亦皆有所賜侯悉起拜之肅如也是月丙申報以病篤幕府乃遣中官式部少輔吉川某就問差劇明日丁酉侯卒于正寢享年四十有九庶長子忠喜嘗拜從五位下守兵庫頭於是嗣立襲封適夫人大井氏生一女名丘子嘗適長岡侯庶子又有二男一女皆幼侯為

人忠直公家之利知無不為當途任事嚴加誡約自十三
登仕至是三十有七年亦卒無憊過是以前後賞賜之數
不可勝紀性又孝順及卒歲母夫人尚在堂而居常侍養
和家人之禮定省告面無所不至也其居家最尚節儉閨
門之內特加嚴焉凡前後諸患唯就正寢而臥使侍者數
人執藥餌未嘗為婦人所扶持至疾篤之後纔召夫人諸
子與之訣畢則便罷之終不死于女子之手平生嘗謂我
幼驕惰未得就良師友就仕之後無復間日悔不及也唯
聞有識者言拳拳服膺庶乎可以半於學矣故處事論義
輒曰若使古人議之將如之何將如之何又嘗謂吾聞人

倮蟲之首唯能知道義始可以異焉吾儕愚夫終未免倮
蟲而冠冕耳又曰我欲處事必先二三其心有可者焉有
不可者焉有可者焉有不可者焉而後擇之又曰凡
事多敗於自是故吾唯自非言多失於自信故吾唯自疑
又嘗與侍臣言我為上選人未始有棄材所為不以所短
害所長也命職置官必用此意設俛聖賢復起吾自許其
必為然也其不須學而知者類如此侯又好為林泉之遊
幕府嘗賜別莊於大橋上因聚土木頗為奇勝之觀官暇
乃游涉其中陶然自適又幼嘗習演劇幕府亦好為之故
終身不廢間日踏舞以散佛鬱之氣上有宴會之事每輒

與爲他不復求爲翫好是歲五月己酉自常磐橋賜第發引明日庚戌葬于岩槻城外龍門寺側浮屠私謚曰義山初侯之執封也遊觀之次行至于此地時屬暮春晴色明媚眺望移時顧謂侍臣曰美哉山川寡人寵靈得有此邑若能終葬于此死不悔也感慨特拜承恩之深及臥病乃曰我死之日魂當歸於城邑使侍臣指畫爲圖曰塋域必當如此碑以記事庶乎可以不與草木朽也及葬時事皆從之云 寶曆十年庚辰五月 臣山縣昌貞謹識

墓誌

君侯諱忠光姓藤原其先嘗居三河大岡因氏焉累世東

都部曲考助七君諱忠利娶天野氏生侯於四谷侯少穎敏頗有風姿歲十三入侍西城受廩三百石長上多年承恩特渥享保十二年初拜朝散大夫任出雲守及幕府嗣職之後累歷考選遷爲侍中秩五千石寬延四年冬十二月增實封五千石并前萬石賜邑總之勝浦於是始列侯職事如故寶曆四年三月命爲執事兼參決中外廢務益封五千石六年五月移封武之岩槻進拜中大夫仍總督侍衛諸官兼參謀機密更益封五千石通前爲二萬石明年三月乞暇就邑旬日乃還侯性忠直大小官務未嘗不致其身是以夙夜在公眷々不懈者三十餘年如一日矣十

年正月病不食者十數日時會幕府有轉進之事內外諸
官訪問日至而侯未嘗一以疾為辭病間即起視事至三
月中病復劇精神恍惚尚且有言及公事者則神爽萬無
一遺其忠誠自然如此四月丙辰疾益篤幕府乃遣中貴
人就問差劇所賜若干明日丁酉卒于正寢自生正德二
年三月七日至是為年四十有九廢長子忠喜襲封嗣侯
適夫人大井氏生一女適長岡侯廢子又有二男一女皆
幼侯為人威嚴閨門之內最具礼疾病未嘗為婦人所養
其謹慎有始終者亦如此越十餘日葬于岩槻城外龍門
禪寺嗣君命臣修墓事臣謹銘其誌銘曰兆瑩之固兮侯

之守乎山河之美兮侯之壽乎維是佳城與天地悠久

寶曆十年庚辰四月

臣山縣昌貞謹誌

故侍中岩槻侯義山藤公碑

公諱忠光姓藤原其先參州大岡人因氏為六世祖忠勝
享祿天父之間大有戰功當神祖創業之際五世祖忠政
徙居東都高祖忠吉為東福皇后滕于京師拜朝散大夫
濃州刺史曾祖忠房祖父忠儀父助七諱忠利母天野氏
以正德二年壬辰三月庚寅生於東都四谷風神秀徹舉
山異允兒享保七年公十一歲八月朝謁德廟九年七月
參政水野侯奉命擇人材一見公曰是子應對如流必能

當大任矣因賜歲俸三百石為西城侍郎十二年拜朝散大夫雲州刺史十八年德廟召見以其獲於西城愈益勉之加俸五百并前為田祿八百石班在侍郎上元文二年為侍郎曹長歲賜金百兩四年攝行侍中事寬保三年助七卒公在憂服奪情起復奉職如故延享二年德廟內禪大君代立九月加祿千二百石并前二千石朝班與諸將等明年十月命為侍中始興大政加祿三千石與故所食共五千石賜田安門外第寶曆元年十二月封絳州勝浦食邑萬石是歲公年四十始為列侯益廣第宅蓋勝浦大有魚鹽之利朝命移封仍食其邑云四年三月為參政兼

領中外事益封五千石賜常磐橋邸六年五月拜中大夫總督侍衛諸曹參謀機密益封五千石并前二萬石為右觀侯明年三月就封旬日而還嘆曰臣幸賴恩澤移封城邑昊天后土未嘗不報上之德意也天下諸侯大夫士庶人咸知公之獲於上而車馬填門玉帛盈府一世之人輻輳邸第苟志於仕進者莫不以公為倚賴也然公愈益恭唯以謹慎守其身耳嘗有言曰吾為朝廷擇人材未始有棄之者不以其短害其長則聖人復起其必不易之也十年庚辰四月丁酉卒于公寢享年四十有九其病間大君遣侍臣就問之中貴人大醫日視之又賜藥餌前後數次

如古集言 卷三 如古集言
儲君亦如之公扶病起拜之肅如也及其大漸大君使中
官式部少輔吉川某就問之公十三歲出仕至今三十七
年未嘗有過也前後賞賜不可勝計是歲春二月朝廷轉
進大弼中外諸曹咨其故事公雖疾亦引正寢而見之指
示詳審無厭倦之狀病少間即起視事然又益劇其及公
事者萬無一漏其忠厚皆是類也世子忠喜拜朝散大夫
兵庫頭嗣侯公夫人大井氏生女適長岡侯側室生二男
一女尚幼公性孝悌母夫人天野氏在堂侍養如家人尤
尚節儉閨門嚴肅病時藥餌不取於婢手在正寢而臥不
死於婦人之手嘗謂人曰吾幼驕惰未得良師友唯是聽

聽言亦學之半矣吾聞人倮蟲之長學者與之異焉如寡
人者可謂倮蟲而冠冕也吾欲處事則思之再三而後擇
之或恐失於自信耳其不待學而知者皆是類也又喜林
泉之游朝命賜大橋莊因聚土木頗為奇觀公幼習演劇
朝廷好之每輒與焉初執岩槻之封也過龍門寺春景明
媚眺望移時因而歎曰美哉山河寡人亟受國恩以至此
極矣寡人即世魂嘗在此城由是畫瑩域於寺側五月庚
戌就葬焉私謚義山侯又謂世子忠喜曰吾與祭酒林子
恭善乞其文以刻碑庶乎不朽矣遂以屬余乃傳其事以
以見公之志也 銘曰於赫侯德匪直也人恭儉守約謹

慎叙倫風雲際會朝廷諮詢爵祿最隆謙損益厚揚名不
竭立言不朽垂裕後昆天長地久

寶曆十年庚辰五月上澣國子祭酒朝散大夫林信言撰

東都深川處士三井親和書

墓碑文中林氏霸府をさして朝廷或ハ大君と書き

蓋し當時の僭祿なり墓誌文中山縣氏敢て此祿を冒

さすふ以て其學のふしきを證す

さて寶曆明和六獄のことは當時秘して傳へず故に

世其事實を知らざる其を辨なり宝曆の事件ハ余嘗

て曙物語一人の記をあらすといつる書を

きり明和乃事作ハ當時の彰刑書あり以て其概略を
知る別ちくく附記して以て考へ備ふ

曙物語 加茂川騷動

加茂川騷動といふは寶曆八年七月の事なりて十二

月三日のうみより霖雨降るき又風雨して加茂の川

逆來の洪水となりしをりから荒神河原并は町口

乃堤又公家とを武士とを別くす異形のおまゝて常

十餘駈け集りて満くく急流へ衆入りむと争ひし

勢ハ恰も注背宇治川此合戦もろくやと思ひ何事の

あて来りしやく人々やすき心をあらさうり其後何

等勤靜もなぐ衆の稍赦念し居る所は同廿四月乃
御沙汰は烏丸大細言御咄め公卿殿上人二十名の御
出向相成地下の友人儒醫社家の輩は御咄めのあり
し次第不容易とのよし此事最は近衛關白殿下より
美濃の北ありし事を志中阿部伊豫守殿へ御由色の
ありし趣もて四月頃より大目附青山伊豆守土井勘
大丈と京お申御所向御取停嚴重の致方諸司代へ連
越有之故り急ぎ寧鑿の時節若公家の水馬粗暴の誓
古等より開来方勅控する事となり孫士乃浪人は皆
屬ると雖も朝議極便はあてまされ秘密の御執

計と申也

事の根原を尋るる初孫主等の況る所は近來將軍家
の私政甚だして朝成を凌ぐの事多く平素とて之
御賄料の品を減額を以て沙汰し属吏をして其趣意
を随ふ族ハ扶持して採り用ひ或ハ賄賂を納めて関
白殿以下御役人を惑わし名瑣細の事と雖も開来窺
と唱へ差圖を清ふとあらざるを決す又武家ハハ
是より反して譬へハ新参の者と雖も三百石或ハ五百
石と知行擅り宛行し採事蹟を論議せしは對坐とし
公家諸侍もも答ふる御所方の被仰ふ皇子皇

女方の御料とては新に増加するを厭ひ近頃は淨
林院宮聖元院皇女より後將軍友の如く將軍家へ寄せら
れ御生涯を以て丘屋に被る渡候御仕儀を毛不願御物
入の御遇分なる旨上意も候なりとの沙汰し奉茂事
斯の如しと忿怒し耐へずと雖も力なし天下幕府お
るを知りて 朝廷あることを知らざるの如し已ま
る儒臣等の英せる新論も西國の天子より或ハ公家
をさして京都の臣家など稱するに二とき蓋苛政に
従ふ諂諛の輩治祿を貪り偶 王室を尊敬するの族
ハ品々事は引書罪なりとて者少うなり時より有志の

知く黙止せしハけよ前主吉家將軍は有徳義化行
ハれてより人心聊和する所ありしに御信者ありて
後は忽ち乃信の更時をえて一層勢ひあつるにつ
加ふる小開白殿幕儀又阿怖せられ意を武家小諂
ぢらるゝなりとて互に語りあひ近日の景状の然し
難しとて遂に義孝を企たりしものとそ
京都の儒小岡本東庵あり伊藤東涯の門下ありて厚く學問を修め
淳正として篤學の士なり東庵の學友小竹内武郡お
り博覧強記丹波の人共小文學の良師なりてきこふ
高し門下より業を受るもの多し徳立ち西郷町三

條尾丸等の諸卿を見其館にお入して國史を讀し以て搢紳小交る多し武郡英傑の公卿小世の興廢を議して非望の企を勅乞徳大寺殿小記して策を献する事といふ
今上天皇秘國院の殿聞ふ達し兵馬武術ハ皆竹内岡本等の勵める所同志は東奔西走して諸侯を説き或ハ會議者陳の如く時機差迫り以て寅年を機會とす別ち寶曆八年故小迫日の會席激しく加茂川水馬の如き象累ふる關東方候を定め訴へ急なり竹内等ハ虜れとなり岡本等は奔す七月十九日議奏ふ親町三

條大納言殿ハ連坐あるを以て殿下の御乳を蒙り御役辞退進退同被致狀趣備ハかゝる變事のとくに殿下の御聴ふなり其詳ハ曩に御門流梅園少將殿陰に企の事を言上さうるといふ初の程に殿下を心にかけさうられざるを少將殿品々陳ぶらば一よを聞白殿下の御評たまふは其證據もとて義孝盟約の連判書を心し台命を定めといふなり梅園少將と申ハ今上の寵妃の曙内侍あり常々玉璽を贈れざる官女の容美麗なりて才智の閑えあり少將は内侍けりあるとき主上此玉机の何の御書を獻覽あし

まは又曙由傳の参りより急ぎ秘し多きふるを内
傳は如ハ嫉妬の念よりして私に其御文を覗ひし
多との名あよりて密事を奏することあるに驚き怖れ
なから窺ひある事より其後大事の豫を悟りて甥
此少將に物語りて有り殿下の聴く連なりとの風雪
其頃の御内儀沙汰も御書物の失ひしを後又殿下
の其書を持参して奏せられし主上の深く被惱
宸襟よりふとの沙汰しけりと

茲に久我太府轉法輪内府より御始々芝山中訖言
中山花入頭等勅問ありし御同意の才に沙汰候へど

も連名書は御加印のあらざるをまつて何等御沙汰
をたのめしと

こゝより又およさなはなりありて傳奏しありし柳原大
納言殿より江左表より於て老中殿よりある石變礼の
事を伺ひ礼されし事の際も同御より其事をあら
ざるに激怒せられし傳京の後を思ひ礼をなされし
ことを語るを多して發病せられしを驚かせられし
梅園の局宿厩務物よりある永の務物よりある物候
らしきを傳へし

宿厩務物よりある大變な事をいふはすゝめざる

勅ふお東候迄頃迄紀傳の如ききよんなるの事有
學問海濱の事小治家の御内家来又は武家の者浪人
等交り恐多るを 後光明院様より開東より執り
砒毒に崩さるゝたふふなど或ハ武家の近來を護を
壞し回さるゝ 王族を凌ぐに至りしを憂ふるに
朝廷ハ寺院の如く成り行き一を士民愁怨をやま
すと徳大寺春丸正親町三條等の人々又いつて憂し
思多るを且那樣を惑しなり國々の大名志を固め國
家の為ハ股肱の武士を乞ひて思召さるゝをたふふの
策を執り不日叡山下行幸成し奉りて此御所を燒は

らハ二條城并ハ大坂彦根の諸城を 皇居より開
東の味方より甲府城へ楠籠り將軍様ハ曰え云様の
御扱より法隱居仰せさるゝ御吏のなき時ハ速に
御征討法大名皆上京す候お東候時ハ御威耀天下に
行はせ民而姓萬喜を奏し可申候ときよたんな事を
奏聞お東より已に近日事ハ發せしむあり 殿下
様此御心配遂に事秘密より多事ハ御取計お東諸忠
義の程を恐れ入りらる其後より 明和三年冬江戸表
より其餘黨の者集りてむろんの兆露はれり皆に罪
せらるゝ事に承りぬいのなる事ありのまゝを安永の

今年又口向の侍等并家々の家来重き御咎より仰付ら
 れ死罪あり遠島あり追放せらるる多し是實歴の務
 勤又罪を訊けせられずして今に悔愧して迎衛様を
 うりむとの沙汰しるる故より御所向一切御取締のこ
 め顔本二頭并又興力四十騎同心二百人並附武家と
 唱へ親くも渡のお来る事を開きあり参りたる
 安多今年の御所務勤といふ或ハ口向務勤といふ
 いふ又迎衛開白様より仰せられし事を
 罪人の官ハ後又迎衛様の御内より申仕じらる
 といふ

寛政八年七月廿四日御咎被仰出候才く左之通

烏丸控大御方

徳大寺控大御方

正親町三條控大御方

坊城控中御方

真野太中御方

勘解由路左中御方

中院左中御方

右八名小官多勢居

今也川控中御方

真倉右兵衛督

裏杉松人右少弁

右三名縁友遠慮

東久世控中御方

所尻三位

水無瀬 三位

中辻 三位

植松 三位

西大路左少将

櫻井從四位

岩倉左衛門佐

所尾左馬頭

右九名遠慮

同十年六月各落飾入通

安永七年六月廿五日

天皇御年回ヲ収テ多勢居のハ名免セラル

安永三年十一月落着の御所務勅とは口向執次以下

の之れ私欲ニ就テ身持被仰之死罪遠島追放等の
刑ニ處セられし事ニ其由實ハ朕部右衛門尉お十
一人の密ニ犯人の藤井右門 浄林院御衣司寮の侍大和守出奔して後右門といふ 等の執
心なる寶曆以来暴動せる勤 王の志ニ渴望して陽
明殿下を署有行状等常なりしより多く御不審を蒙り
衆名割絶ギといふ

遠島

口向執次頭

高屋遠江守

死罪

内堅

檢非違使 服部右衛門尉

同上

圖書寮

田村肥後守

同上

臈口

津田能登守

同上

内記

西池主鈴

遠島

右衛門尉伴

服部廣深

同上

能登守伴

津田右馬少允

同上

肥後守伴

田村圖書允

同上

主鈴伴

西池木工

同上

山本主殿

同上

開目縫殿

同上

藤本修理

中退放

飯室左衛門志

同上

遠江守伴

高屋越後守

同上

渡邊左近將曹

同上

本庄左源太

同上

主殿伴

山本金吾

同上

修理伴

藤本左膳

同上

縫殿伴

開目主膳

西池文治

隱岐掃部權助

山村 宜

山口中務丞

新海伊織

井上主膳

伊地知大學

岩佐丹治

小野内匠權助

岡本左近

田中大膳

岡本右近

吉村刑部丞

世續右衛門尉

坪田左兵衛志

中川遠治

中大路右近

村雲右近將監

宗岡式部丞

増澤宮内

藤木左馬

佐藤友之進

北大路頼母

鈴木小主水

杉山左衛門尉

以上洛中洛外御拂

石家名斷絶りて遠島以下寛政元年四月廿九日依

御内意赦免内高屋遠江ハ寛政七年藤木修理ハ同

九年杉山左衛門ハ天明六年四月赦免相成

文中まゝ不熟の文字解せざる語あり治原書不従ひ

て改めず其事實を知らず好けなきを以てするあり

山縣大貳等断刑書

亥八月廿一日(明和四年)阿部伊豫守様御宅織田

美濃守名代として織田主馬被召寄被仰渡

其方事家来吉田玄蕃儀權高して役柄不相應の儀共

有之候ニ付先達而答申付候由然ル所玄蕃儀山縣大

貳と申者と出會甲府碓氷箱根等の御要害之儀なりと

致物語御場所柄之儀を申散之候ニ付御吟味ニ相成
候由假リニハ公儀へ拘リ候儀ニ候間其時を第一取
計ニハ役人少ク有之候共可成丈之役人申付早
速玄蕃ニ相尋其事虚實淺深等之差別何礼ニ公儀へ
訴可申之时无其儀右玄蕃咎申付候儀ハ其節一合對
し候儀ニ候所其時を専ら取計公儀へ對候儀を吟味
申付候迄ニ等閑ニ相心得役人少候連吟味及延引
候所不埒之至ニ候依之隱居被仰付藝居仕可罷在候
織田八百八名代坂井作左衛門へ被仰渡
織田美濃守事不埒之所有之隱居被仰付藝居仕可罷

在旨被仰渡候先達假養子ニハ相願候ニ付其方へ為名跡
貳萬石被下置候迄而羽州奥州之内ニ而所留可被仰付候
織田對馬守名代由良播磨守へ被仰渡

織田美濃守家来吉田玄蕃儀不埒之儀有之候ニ付
咎之儀美濃守家来共評議相決美濃守へ申立候以
後其方へモ一通申聞美濃守よりモ内ニ申聞候へ
ども役人共ハ評議相決候儀其上迄々取計方モ可有之
ニ付先役人共申聞候通申付置可然旨美濃守へ及挨
拶候由ニ候右玄蕃儀重キ役儀をモ相勤候ニハ事ニ
候へハ右不埒之儀モ得と承知可申儀殊ニ其方同様

其上美濃守儀實三男之事ニ候ヘバ平日共ニ家中之
取計等モ可承置儀其上玄蕃儀浪人山縣大貳ト申者
ト出會候儀取沙汰ニ有之儀ニ候ヘバ承知心付方モ
可有之候所等閑ナラ取計不行届無念之至依之御役
被召放隱居被仰付候急度慎可罷在候

織田式部ヘ被仰渡

同氏對馬守儀御役被召放隱居被仰付候依之家督無
相違其方ヘ被下置寄合被仰付候

織田八百八名代坂井作左衛門ヘ申渡覺

鍛冶橋之内屋敷被召上候溜池端屋敷ニ可罷在候家

柄之儀ハ向後同苗山城守通多るべく候

庚八月二十一日

御伺之上御目通

式部

差扣

八百八

右阿部伊豫守様宅ニ於テ御老中不殘御列坐御申渡
ハ伊豫守様御立會大目附筒井大和守

依田豊前守様御役宅ニ而御仰渡松平庄左衛門立會

申渡

永澤町安兵衛店 山縣大貳 四十三
浪人

其方儀常ニ弟子共渡世又ハ藝術之勵ヲモ候間門弟
其外懇ニ致候者ヘ兵亂或ハ變事有之節何レの方ニ

之相立事、寄立身等可致旨申聞候段兵乱好、候道
理ニ相當リ且又甲府御城付御武器負數之儀覺候ニ
任セ申散、且ハ螢惑星天の心宿へ掛リ候石ハ兵亂
之萌ニ候由古書ニ有之候、其後上州邊百姓騷立候
間少シハ其驗有之事ト相咄當時ハ禁裏行幸ニ
無之、トハ同前之由雜談致シ堂上方之古實ニ有
之趣を草紙ニ認或ハ兵學之講釋ニ付地利へ不引當
候、難相分品ハ甲府其外及見聞候地利他名城へ引
當御要害之場所を専ら譬ニ取用講釋致候儀共旁、
恐入不敬之至不届至極ニ付死罪申付候

山縣大貳方三能

在候京都正親町
三條中将家之由申立候

藤井石門

其方儀浪人山縣大貳多能之儀を本町三町目町西師
宮澤準曹神田小柳町三町目浪人桃井久馬へ吹聴、
候へども申消候趣ニ付大貳儀甲府之御城御要害等
引當兵學致論談道理相分リ候由之儀物語仕且又四年
以前螢惑星天の心宿へ掛リ候由石古書之通兵亂之
萌ニ候、其後上州邊百姓騷立少シハ、有之旨大
貳申候、所慥ニ相聞候多め土御門其外、有之同様之
沙汰之由取持申聞候上ハ兵亂之萌可有之哉難計申
甲府要害能候へども以前武田勝頼被攻破候節之

通ニ致シ攻候々甲府之沔城落可申由都て火矢之儀ハ
風上ヨリ射掛候ニ付南風ニ候ハ品川邊ヨリ射掛能候
由或ハ甲府之繪圖ニ引立軍立論候々可相分旨之儀
當地之地利地名ハ引當雜談仕江戸之沔城西の方御手
薄之由ニ付譬バ其方儀攻候て東の方御要害堅固な
る場所より攻可申事之由申之勿論其方儀反之儀
ハ無之事ニ候へども一休大貳を致信仰兵學論談又
合戦之致方を申募り候ニ寄り合戦致候々もの所存
ニ相成自然と前書之通上ニ無之恐多儀を雜談
致候段不敬之儀不届至極ニ付獄門ニ申付候

久保平三郎代官所甲州巨摩
郡龍王新丁村山縣齋宮事

百姓市郎左衛門

其方儀先達而病死致候百姓市郎左衛門株を致相續
人別帳ハ之市郎左衛門と志ろし置候上ハ百姓不相
成候所他國ハ罷越候節ハ以前之通山縣齋宮と名乗
致帶刀且亦弟長澤町浪人山縣大貳兵學講釋之節甲
府其外御要害之地利ハ引當攻方防方等之儀申散し
不敬之儀に候所辭ニ申聞候事ハ不苦と存差置候心
付之無之罷在候段旁不届ニ付中退放申付候

水野壹岐守家来
吉見長左衛門

其方儀去年十二月始本町三丁目町醫官澤準曹罷越
彼是疑敷趣可訴出裁之旨及内談候具後名前書付請
取置候所當二月右準曹吟味二相成候迄等閑致し差置
候儀不届二付勤向取放主人方三答申付候様申達候
間其旨可存

勢州宇治郡今在家町御師鶴飼
又兵衛方罷在候式部事

遠島

竹内

正庵

五十六

織田美濃守家来

湯田

頼母

重追放

關野定右衛門

拓源四郎

同人用人

松原郡大夫

同上

津田

庄藏

輕同人
家来

吉田

玄蕃

同人領公上州甘樂郡小幡村
京都妙心寺末崇福寺隱居

輕追放

梅叟

構無之者

織田美濃守家来

高見澤豫右衛門

時田儀右衛門

阿部伊豫守家来

今村

丹治

茂上

六弥

永井飛騨守家来

内藤 源五郎
市川 清藏

新市番頭津田

荒木九郎兵衛

日向守元家来

小梨村

藤本甚助御代官町甲州

加賀美上総

上総父

加賀美信濃

甲州巨摩郡龍王新町村

孫七

百姓市郎兵衛屋守

朝倉 立庵

松平遠江守家来

澤田 文沼

土屋越前守組与力
中村八郎右衛門地借
永澤町安兵衛店山縣
大貳方三罷在候弟子

富永 道生

盲人

東壽

大貳名仕

彌助

靈岸島湊町太兵衛

高橋 文仲

店町医師
永澤町家主

安兵衛

松平伊豆守家来

福田 傳藏

右八月廿一日依田豐前守様役宅於而被仰渡

訴人

本町三目源兵衛店

宮澤 準曹 四十九

町医
神田小柳町与兵衛店

桃井 久馬 四十九

浪人
同永留町三目代地
平右衛門店

佐藤源大夫 五十七

南鍛冶町三丁目忠右衛門
店禪宗

灵宗 五十一

此者共儀永澤町浪人山縣大貳物語之由同方居
候堂上方家来と偽り藤井石門不取留不敬之儀申
出候付難心得故出會之度々可兼糺被尋問候所公義
へ對し恐多事共致雜談候段大貳石門不届企致し候
と存推量を以て不慥儀を治定の趣相認大貳弟子共之
内親敷随弟と承候へども何之儀と不相糺徒党之事と
相察荒増承候儀を収集め認置其内より大貳石門知
人より言之者も有之由重き事共を相認此者共儀蔭
相成以手寄可訴と彼是取捨一途に御為を存可訴候公

疑敷心付候趣虚實子細及見聞候迄有体可訴出所無
上恐多儀を厚く相聞候様申立候段却而輕公儀致
方不届至極殊此者共訴より大勢無罪者迄致入牢御
詮議に相成其上無名之捨訴状捨文等有之石認方全
此者共之仕業に聞重く不届之至重科之者付死罪申
付べき者候所大貳石門企之儀ハ毛等無之候へども不
敬之雜談申散候段ハ此者共申立より相知是候大貳儀
ハ死罪石門儀ハ獄門に相成御仕置相立乍不届訴人之
事故以此所此者共助命申付三日晒之上遠島申付者
也 亥八月

幸磨又曰山縣大貳の墓碑四谷全勝寺にあるもの
外に尚二所在り其一ハ甲斐國巨摩郡龍王村金剛寺
に在り（龍王村ハ大貳の郷里なり）金剛寺ハ其菩提寺なり
大貳の歿後親戚故舊相謀りて其招魂の爲小石塔を建
立せしものなり（其一ハ常陸國新治郡根古屋村泰寧
寺に在り）資治維新愛知縣人水野正信編輯といふ書ハ明和四年
丁亥八月廿一日山縣大貳兵學藤井石門京正親町三兵衛子と
茶中将家臣の議論し或ハ甲府及江戸の
要害場所攻撃の譬喩雜談の罪科に依て死刑石門の
首獄門に掛る赤城翁云山縣大貳ハ甲州の人自言云山縣

三郎兵衛が後と頗る學識あり文章を善くす別号を
柳莊といふ所著柳莊新語専ら天朝府朝の事務を論
議す又天経發蒙を著す大貳立言激烈上犯の罪を以て
遂に収て獄に下す明和四年八月某日決小臨で辞世の詠哥
あり（墨書なり）何れ恨ん月今宵とてをなむある身
り（あらねど）翁又云大貳が門人高原某大貳が屍を請
て常州筑波山の麓小墓に石を建て題して柳莊先生の
墓と云ふあり今年八月山縣昌臧氏泰寧寺に到りてその
實況を搜索す（概略左の如し）
根本屋村ハ筑波連山の麓にあり墓標ハ天然石にて

高さ二尺四寸横七寸墓石高さ五寸横三尺表面小卓榮
良雄居士靈位と記し右傍小明和四丁亥星左傍小月
廿一其墓と誌あり四ッ谷全勝寺の碑は卓英とあり金剛寺の碑は卓映とあり皆一定ならず
過去帳より卓榮良雄居士明和四年亥八月廿日とありて同じく俗名を記す

現住園部達禪小就き質しに該寺ハ三十年前同
祿又罹り右記録より烏有に属す唯口碑に存す所ハ
大貳門下生園部文之進と云者根古屋村郷士尸を携へ来り此
寺に葬るといふ一説は本村文之進宅地は首級を葬
りしと云所あり因て文之進の孫園部新平の家に至り

事實を探るに庭前一の榎樹あり其下に首級を葬りし
と云其樹を見るに五六十年の物なり百年以上を経し
木とはならず且其説信ずるに足らば又同家は日記
の徴すべきものなり

按ずるに此碑も亦大貳恩願の門人招魂の爲に建立
せしものなりと云ふはさうな遺骸を葬りて卓英良
雄居士の戒名を付せしハ四ッ谷全徳寺なるを後に甲州
常州ともこれをいひて更に碑を立て墳墓に混ぜざ
るゝめ其一字を改めたるものなりと思はるなり卓英
ハ良雄の文字に對す處きたるれど必ず英の字あり則ち

雄の字に對をどあるのなりされ決して榮暎等の字を
用ふ所なりとて、其戒名は金徳寺則今の金勝寺少て付しとの證
とならんと思ふなりとはいへ、戒名の下に靈位の二字を加へるも
其招魂の碑たるを示さるゝのなり又資治雜笈に柳莊先
生の墓と記ありとあるは訛傳なること著し同書に門人喜
原某の屍を請て葬れりといひ山縣昌臧氏の墓なる
ハ門下生園部文之進と云者携へ來たりといふ其傳同し
からずといふは、こは門人数人相謀りたるものにて彼是其
傳の異なるもてあるべし然れども、疑ふ所なきあらざる
なりとされうるものも大貳の墳墓ハ東京四谷金勝寺小

在るもの現ふ其子孫の香花を供する所にて決して
疑ふべからざるものと定む所なきなり或ハ迷疑ありむと
ををわらうる曰ふて聊、こにこれを辨す

好古集說卷三終

好古集說卷三終

明治廿
同



日印刷
日發行

編輯者 佐伯利磨

東京市本郷區臺町廿二番地

發賣所



三十四八のり
ウ合リ

